

「大学院にて指導教官から得た学びを、
新天地での教え子たちに」



◆ 齊藤 実 教授
指導教官

神奈川大学大学院経済学研究科にてロジスティクス特講担当



◆ 金 艶華 准教授
齊藤教授の教え子

高崎経済大学に奉職されている(2024 年現在)

司会進行

三島 斉紀 准教授

神奈川大学大学院経済学研究科

三島先生：先生方、今日はインタビューを受けていただき、誠にありがとうございます。

金先生：齊藤先生に初めてお会いしたのは研究室でした。真面目そうな方だなという印象でした。最初に、大学院で勉強をするということは非常に厳しく、覚悟を持たなければならないと忠告されたことを思い出します。その時は、先生が仰っている言葉の意味を十分に理解できていなかったと思います。しかし、研究を進めているうちに、段々とこれは本気やらなければならないなと感じ始めたのを回顧します。

齊藤先生：最初は幼い感じがする、でも、意志の強そうな院生が入ってきたな…という感じでした。博士号は3年で取るものだよ…という話と、そのためには、「入学したからと言ってのんびりしているのではなく、最初から飛ばしていってもらよう」という話をしたように思います。実際に、毎週少なくとも一度は研究の進展具合を報告してもらっていました。

金先生：そうなんです。何らかの文献の輪読を行ったり、知見を深めるために役立つ論文についてのアブストラクトを報告したりするだけではなかったんです。博士課程というのは、修士の延長線上で研究を行うものですから、大凡、ここまで進んでいます…という話だけを月に一回程度していけばよいものであり、そうやって方向性だけ指導していただけるものだと考えておりました。ですが、齊藤先生からはそれだけではなく、日本語チェックも含め学会報告の仕方など、細かな研究の手法やノウハウを叩き込んでいただきました。

私も教員となりましたので、もし院生を持った場合、自分のプロパー・テーマはこれだから、これについて一緒にやっていこうとするのが楽だろうとは推測しますが、齊藤先生はそのようなやり方はなさいませんでした。あくまでも私が興味を持っていることに沿いながら、それに対して、どのような視座・角度から分析をしていけばいいのか…ということを教えてくださいました。

齊藤先生：金さんはもともと、修士論文で中国の医薬品の流通に関して調査されていました。ただ、それを博士論文に向けて、どのように体系化していくか…ということについては、意識して指導していったように思い出します。また、それにより種々の、これまでになかった新しい成果を生み出していかれましたので、選ばれたテーマも非常に良かったと思います。

金先生：私が勉強したいというテーマを大切に、それを尊重してくださった齊藤先生には非常に感謝しております。齊藤先生の研究に対する姿勢は、非常に真摯なものであり、ある一定のレベルに達するまでは、繰り返し、繰り返し、一点を掘り下げて聞いてこられます。現場での問題とひたむきに向き合っ、その解決を本気で考えるというような、現場での難題に真摯に取り組む姿勢も齊藤先生の横にいて学ばせていただきました。また、報告を聞く人がロジスティクスのプロパーの人ではないことも想定しながら、「これについての専門家ではなくても分かるように説明できなくてはならない」ということも幾度となく指摘されてきたように思います。

私は齊藤先生に、将来は大学の教員になるつもりであるとお伝えしておりました。そうしたこともあり、齊藤先生は、表現の仕方や文章能力まで繰り返し指導してくださいました。また、早めに大学教員としての“慣れ”を作っておいた方がいいという考えから、神奈川大学にて非常勤講師をさせていただく機会を設けていただいたこともありました。

三島先生：事実、齊藤先生の教え方は定評があり、学部のゼミ生たちも皆さん、大手企業に就職されていますものね。

金先生：そのように早目に教壇に立たせていただいたことにより、「人に教えるということは、自分にとって良い勉強法の一つとなる」ということにも気づかせていただきました。人に分かるように説明するためには、どういう風に表現すればよいのか、上手に伝えられなかったとすれば、どのように改善すれば、もっと分かりやすくなるだろうか…ということを試行錯誤する、そうした良い機会となりました。

齊藤先生：金さんは、非常によく語学ができました。それはすごいなあ…と思いながら傍から見ておりました。ただし、そのように口頭で話すことと、上手に日本語で書けるということは、また別の能力が求められるものです。その点で、まだ少々改善の余地があったように回顧します。例えば、論理的な書き方や、展開方法などについて私はアドバイスしたように思います。語学以外で金さんが頑張っておられるなど感じたのが、ヒアリング調査についてです。研究手法としては、まず現状分析が必要となるのですが、そのためには企業にインタビューに行かなくてはなりません。ですが、実際にインタビューをすることって、結構大変なんです。相手側からすると、時間を割いて話しても、自分にとって何のメリットもない場合も間々ですから。ですが金さんは、幾つもの現場に足繁く通って、担当者たちから信用を勝ち得て、ヒアリングを進めておりました。そういった地道な努力を積み重ねて作り上げていった博士論文だったと思います。金さんは、本当に手を抜かなかったですね。

金先生：博士論文を書く際に特に意識したことは、オリジナリティを発揮したり、明瞭にしたりしようとしたことだと思います。単にまとめたことを報告するだけでは博士論文にはなりません。この業界の人が聞いて、「ここまで分析できているのか！」という知見を深めてもらえるようにすると同時に、次の研究の土台となるにはどうしたらよいのか…ということを常に意識してきました。齊藤先生から紹介していただいた某倉庫や、某大学病院などが研究に協力してくださったおかげで、論文を作り進めていくためのレンガを積み上げていくことができたように思います。これは、自分一人の力では決して成し遂げられなかったことだと感じております。皆さまからの協力によって、出来たものに他なりません。様々な支援があったからこそ、数多のハードルを乗り越え、査読付き論文を数本作成することができたと自覚しております。

また、実際にこうした調査や研究を行っていく上で、院生同士の絆もとても大きな助けになりました。大学院生が非常に大勢いるようなところとは異なり、経済学研究科の院生たちの繋がりは、とても強いんです。事実、私の先輩も九州の某大学にて、現在先生をされておられますし、同じく中部地方で先生をされている先輩もおられます。その先輩たちは、私が入学した際に神奈川大学の色々なルールや、細かなことを親切に教えてくださいました。そして先輩たちに教えていただいたことを、私が先輩となった時にそれを後輩たちに伝えていく…というように、経済学研究科の院生同士の間には親切的な雰囲気が満ちていたように思います。今でも、そうした先輩たちや後輩たちと密に連絡を取り合っております。それが神奈川大学経済学研究科の強みではないかなと感じております。

三島先生：では、これから神奈川大学大学院経済学研究科に入学されてこられるだろう後輩たちに一言、お願いいたします。

金先生：そうですね。2点ほどあります。

私は大学の先生になりたい、自分の興味のある研究テーマを一生の仕事にしたいという夢を叶えることができました。ですが、これは自分の力だけで成し得たものではありません。それは、常に肝に銘じております。周囲の方々の助けのおかげ…と、感謝の気持ちを忘れないようにしております。

こうした感謝の気持ちがあれば、他者に対して、いい加減なことをしてお茶を濁そうという気が薄くなり、責任感を持って仕事をしなければならないと常に気を引き締めることができます。その気持ちがどんどん良い結果へと繋がっていき、そのようにして自分がうまくいった暁には、今度は自分が他の人を助けたり、支援したりしなければならない、そうした気遣いの輪を広げていかなければならないと考えられるようになります。そうすることで、次にもうまくいく人、上手に事を進められる人を生み出すことができるからです。こうした良い連鎖を大切にしたいと思っております。

金先生：2点目は、諦めないことです。天賦の才で賢い人はいます。確かに、そういう人の方が成功する確率が高いと思います。ですが、この業界では、博士になることを目指し、そして、その先に大学の先生になることを睨みながら、自分のやりたい研究テーマにコツコツと没頭する人たちが評価されます。好きなことを決して諦めずに、最後まで注力してほしいと思います。

三島先生：では、最後に指導教官でおられる齊藤先生の方から、金先生への今後のエールをお願いいたします。

齊藤先生：金さんは、学生の面倒見がよい、そうした先生となっていくことと思います。

勿論、同じ苦勞を分かり合える留学生の面倒も丁寧に見ることができる、そうした先生になってくださることと思います。

金先生：齊藤先生から教わったことを丁寧に学生たちに伝えていく、これが一番の恩返しであると思っていますので、そのようにしていきたいと思っています。

三島先生：お二方、今日是对談に応じていただき、ありがとうございました。

金先生、新たな職場での活躍、お祈りいたしております。

<対談は以上> 2019年1月23日に神奈川大学附属経済貿易研究所にて実施